

「コミュニケーション方略」は教科書でどのように扱われているか

ノートルダム清心女子短期大学 達川 奎三

## 1. はじめに

外国語学習者にとって、語彙・文法力を高めたり、言語の使用場面や働き(functions)についての理解を深めたりするとともに、会話を切り出し・維持・修復・終結するための方略(communication strategies)を身につけることは重要である。従来、「文法シラバス」、「場面シラバス」、「概念・機能シラバス」などの教材が多く出されてきたが、コミュニケーション方略の教授(習得)を枠組みとしたものはまだ少ないと思われる。本研究では、これまでの談話分析における研究者の知見を踏まえ、外国語学習者にとってコミュニケーションを行う上で欠くことのできない方略が、どのように日本の高校生に提示されているかを考えてみる。具体的な手法としては、高等学校用検定済教科書「オーラル・コミュニケーションA」を分析し、その特徴のいくつかを明らかにしてみたい。

## 2. コミュニケーション重視の外国語指導への流れ

1999年3月高等学校新学習指導要領が発表された。中学校の新指導要領と併せて今回の外国語科における改訂の特徴は以下のようにまとめることができる。

- (1) 外国語科を必修とする。中学校では英語を履修させることを原則とする。
- (2) 「実践的コミュニケーション能力」の育成を目指す。
- (3) 中学校において「聞くこと」及び「話すこと」を重視する。また、目標及び言語活動を3学年一括表示する。
- (4) 高等学校において、4つの領域の有機的な関連を図った「コミュニケーション活動」の指導を行う。また、「コミュニケーション活動」の基本条件を示す。
- (5) 「言語活動の取扱い」で「指導上の配慮事項」と「言語の使用場面と働き」を明示する。

(新里 1999: 8)

これらは21世紀へ向けて、より一層のコミュニケーション重視の外国語指導への流れと捉えることができる。そして、上記の5点目は今回の改訂で初めて登場したものであり、教室での効果的なコミュニケーション活動を創造していくためには、教授者のコミュニケーションに関する幅広い知見が必要となってくる。この意味において J.A. van Ek (1975)の「文法と語彙という文構成の道具はそれ自体が目的ではなく、コミュニケーションの機能の実現のための手段である。そして実際に重要なのはこの技能である」(米山、松沢訳 1998: vii)という主張は、外国語教授者の多くが指針として受けとめるべきである。

### 3. 言語の「機能」とは

言語の働き、つまり「機能(function)」を『ロングマン応用言語学用語辞典』では「言語の発話や単位が用いられる目的。言語教授では、言語機能は要請、謝罪、不平、申し出、お世辞などのような行為の範疇として記述されることが多い。言語の機能的な使用は、単に文の文法構造を研究するだけでは決定できない」(p.146)と解説し、次のような例を示している。

#### (命令形の文のさまざまな異なった機能)

Give me that book.	(命令 Order)
Pass the jam.	(要請 Request)
Turn right at the corner.	(指示 Instruction)
Try the smoked salmon.	(示唆 Suggestion)
Come round on Sunday.	(招待 Invitation)

また Widdowson(1978: 29)は、「談話の一貫性」に関わって次のような例を示した。

A: That's the telephone.  
B: I'm in the bath.  
A: O.K.

そして我々はこのようなやりとりを聞くと、以下の( )の部分を補いながら談話の意味を解釈する(p.29)と述べている。

A: That's the telephone. (Can you answer it, please?)  
B: (No, I can't answer it because) I'm in the bath.  
A: O.K. (I'll answer it).

B.の発話は Where are you? などの問いかけに対してであれば、自分の居場所を reporting していることになるが、この場合それぞれの発話は requesting, excusing, acceptingの機能を果たしていると考えられる。

それでは、「言語の機能」を決定する要因にはどのようなものがあるのだろうか。次の談話を考えてみたい。

A: What time is it?  
B: Five past six.  
A:

(McCarthy 1991: 18)

A.の発話は、ふつう「何時ですか」という情報を求める askingの機能を持ち、B.の与えてくれた情報に対して2番目のA.の発話はおそらく

1. A: Thanks.

などがくるであろう。しかし、別の可能性としては

2. A: Good! Clever girl!

3. A: No, it isn't, and you know it isn't; it's half past and you're late again!

などもあり、特に 3. の場合は A. は純粋に情報を求めているのではなく、B. を非難（または叱責）する (accusing) ためにことばの毘にかけている感じさえする。このような例から「どの発話においても、そのときの参加者 (participants) と役割 (roles) と場面 (setting) とがそろってはじめて機能が決定され、さらにこれらを考慮した上で言語形式が解釈される」(同書 p.18) ことがわかる。

#### 4. 代表的な「言語機能リスト」

##### 4.1. 2つの Threshold Level

シラバス立案、カリキュラム改革、試験問題開発、教科書編集、教育課程編成などにもっとも広く活用され信頼できる「言語機能リスト」として J.A. van Ek が中心となり、1975年に欧州会議 (the Council of Europe) が出版した *Threshold Level English* がある。これは、「言語例として英語を選び、この言語が日常生活でコミュニケーションの手段として用いられている国で学習者が自力で行動するために、ことばをどのように使えばよいかを明確に示そうとする最初の試み」(米山、松沢訳 1998: i) であった。そこに示されている言語機能には以下のようなものがあり、それぞれがさらに下位区分されている。

##### Threshold Level 初版の言語機能リスト

1. Imparting and seeking factual information
2. Expressing and finding out intellectual attitudes
3. Expressing and finding out emotional attitudes
4. Expressing and finding out moral attitudes
5. Getting things done (suasion)
6. Socializing

これに改良を加えたのが J.A. van Ek and J.L.M. Trim (1991: 22) による言語機能リストである。

##### Threshold Level 1990 の言語機能リスト

1. Imparting and seeking factual information
2. Expressing and finding out attitudes
3. Getting things done (suasion)
4. Socializing
5. Structuring discourse
6. Communication repair

#### 4.2. 初版と改訂版との比較

初版と改訂版を比べてみると多くの改良点が見られるが、以下の2点が特徴的である。

##### 4.2.1. コミュニケーション能力の構成要素の明確化

コミュニケーション能力の定義については諸学者がこれまで色々な主張を唱えてきたが、その構成要素を以下の区分のように明確に示した。(\*) を付けた部分に改良が見られる。

### コミュニケーション能力 (communicative ability)

- 言語的能力 (linguistic competence)
- 社会言語的能力 (sociolinguistic competence)
- ディスコース能力 (discourse competence) (\*)
- 方略的能力 (strategic competence) (\*)
- 社会文化的能力 (sociocultural competence) (\*)
- 社会的能力 (social competence)

### 個性の最適の発達 (optimal development of personality) (\*)

- 認知的発達 (cognitive development)
- 情動的発達 (affective development)

#### 4.2.2. 「言語機能」に2つの範疇を追加

初版において、文の上にくるディスコース(discourse)と会話構造(conversational structure)の説明が欠けているとの批判から、言語機能の分類に根本的な変更を加え、以下の2つを付け加えた。

「ディスコースを組み立てる」(structuring discourse)

「コミュニケーションの修復」(communication repair)

#### 5. 「コミュニケーション方略」とは

ここでは「コミュニケーション方略」を「意味の交渉(negotiation of meaning)を行うために、会話を切り出し、維持・修復し、終結させる能力」と捉えることとする。その具体的なものとしては次のようなりストが1例としてある。

##### 主なコミュニケーション方略

1. Starting a Conversation
2. Getting the Floor
3. Keeping the Floor
4. Introducing a Topic
5. Changing a Topic
6. Asking for Repetition
7. Asking for / Giving Clarification
8. Checking and Indicating Understanding
9. Breaking in / Interrupting
10. Taking Time for Thinking / Hesitating
11. Breaking / Avoiding Silence
12. Closing a Conversation

(田中、ラウアー、達川 1999: 5)

例えば、Keeping the Floor (発言権を保つ) の方略に用いる表現としては

I have two reasons for supporting his plan. First, ...

I have another place in mind. You might be able to visit Hiroshima.

As I was saying, ...

などがある。これらの表現を用いると、聞き手は発言を差し控え、話し手は発言権を保つことができる。

なお本研究では、*Threshold Level 1990* で新たに加えられた「ディスコースの組み立て」や「コミュニケーションの修復」と密接に関わり、比較的分析し易い4つの「コミュニケーション方略」に用いられている言語機能に注目して教科書分析を行うこととした。

## 6. 教科書分析

学習者に「コミュニケーション方略」がどう教えられているかを探るために、高等学校用検定済「オーラル・コミュニケーションA」の教科書を分析した。対象としたのは1998年度採択率上位8社で、占有率は合計で76.2%である。今回は上記の方略のうち、5, 6, 7, 10の4つについて調査した。その際、それぞれの方略を用いるための言語的手がかり（表現）を明示的に含んでいる場合のみを抽出した。したがってGiving Clarificationの例として次のようなものはカウントしていない。

A: Oh, I see. Where should I get off?

B: At the second stop. The bus stops just in front of the station. (*English Street*, p.25)

### 6.1. Changing a Topic

「話題を変える」ための表現はあまり登場していない。高校生用の教科書教材ということで、談話の分量をある程度制限する必要があり、その中に複数の話題を盛り込むのは難しいようだ。「話題を変える」ための表現を提示していない教科書も1社あり、8社合計でも14例しか登場していない。

#### ①頻出する表現

【5社で登場】

Kai: Glad to meet you, too. Here's a registration form. Could you please fill it out?

Kenta: Sure. Here you are.

Kai: Thank you. By the way, did you bring any Thai money?

Kenta: No. (*Interact*, p.54)

#### ②一部の教科書でのみ登場する表現

【2社】

• Speaking of computers, I bought this small dictionary the other day. (*ECHO*, p.74)

Sarah: Good. Then we don't have to worry about the weather.

Ken: Right. Now what are we going to take with us? (*EXPRESSWAYS*, p.20)

【1社】

J: Well, at first, I didn't like my job. But then I got used to the work. It's not bad.

R: I'm glad to hear that. Listen, can we get together sometime soon?

J: That'd be nice. (*English Street*, p.18)

### 6.2. Asking for Repetition

会話の相手に「反復を求める」発話は、10種類以上の異なる表現が見られた。相手の言っていることが聞き取れなかったり理解できない時に、「反復を求める」行為は会話を維持・修復する

ための大切な方略であるが、教科書での登場回数は少ない。また全般的に会話があまりにもスムーズに展開し過ぎる印象があり、この「反復を求める」表現が本文中に全く登場しない教科書が2社あった。

#### ① 頻出する表現

【5社】

- Pardon? (または I beg your pardon? Pardon me?)
- Would you say it again, please?

【3社】

- Sorry? (または I'm sorry?)
- Excuse me?

#### ② 一部の教科書でのみ登場する表現

【2社】

- What did you say?
- What's ... again? (What's your name again?)

(Hello there!, p.18)

他3例

また、相手に「(もう少し) ゆっくり話すように頼む」表現は、数は少ないが以下のようなものが見られた。そしてこれらの表現が本文中に登場したのはわずか3社にすぎない。

- Can you speak (a little) more slowly?
- Can you speak a little slower?
- I can't understand. Please speak slowly.
- Could you say that again more slowly?

### 6.3. Asking for / Giving Clarification

#### 6.3.1. Asking for Clarification の表現

相手の発話に対して「明確化(詳しい説明)を求める」ことはもっとも基本的で必要不可欠な方略であり、豊富な表現例が見られる。

【5社】

- Do you mean ... ? (または You mean ... ?)
- What kind of ... ?

【4社】

- Sorry, I don't understand what you mean. (または I can't follow you.)
- What does ... mean?
- 相手の発話(の一部)をそのまま(上げ調子で)繰り返し明確化を求める  
(例)

Tapio: Look at this picture. The Sami are gathering reindeer.

Aya: The Sami?

Tapio: Yes. They are the indigenous people in Lapland.

(ECHO, p.86)

【3社】

- What do you mean?
- What's that?
- What happened?
- 句や節の一部に疑問詞を用いて明確化を求める  
(例)

A: Is it coeducational?

B: Is it what?

A: Are there both girls and boys at your school?

(English Street, p.13)

【2社】

- Can you explain that again?

【1社】

A: I liked it very much. It's an exciting city.

B: Exciting? In what sense?

A: Well, there are lots of people, cars, bikes, shops, ... and temples, too.

A: Temples?

B: Yes, temples. Thailand is a Buddhist country.

(Interact, p.50)

その他

- What does ... taste like?
- How large is 'large' ?
- Which one?
- Why do you think so?
- Is it true ... ?
- I hear ...
- So?
- What do you actually do?
- Pardon?
- Like how? など多数

### 6.3.2. Giving Clarification の表現

一方、自らの発話内容を主体的に明確化しようとする方略はあまり用いられていない。相手に尋ねられて、それに返答することによって明確化をするというパターンが多いようである。「言い換えのため」の表現を身につけることは、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成にも不可欠であり、改善が望まれる。

- It means ...
- I mean ...
- So ...

(例)

A: I have a big family. I have twin sisters a year older than I am. I also have a younger brother. And my parents ...

B: So you're a family of six?

A: No. My grandparents live with us, so there're eight in our family.

(English Street, p.8)

- That's ...
- a kind of ...

A: How much is it?

B: £ 2.99. Call it £ 3.

(EXPRESSWAYS, p.55)

A: How much is it?

B: £ 3.99. Say £ 4.

(EXPRESSWAYS, p.56)

- one of ...
- like ... など

#### 6.4. Taking Time for Thinking / Hesitating

それぞれの教科書によって数のばらつきはあるが、自分の次の発話内容を考える時間を確保するための表現を全社が提示している。実際の会話場面ではできるだけ「沈黙」しないように、このような‘つなぎのことば’を使用するよう指示している教材もあった。この点については、2002年から施行される『中学校学習指導要領』の中でも、主な指導事項の1つとして「つなぎ言葉を用いるなどいろいろ工夫して話が長くように話すこと」と示されており、教室での言語活動を通してしっかりと定着させたいものである。

#### ①Taking Time for Thinking の頻出する表現

【 8 社】

• Well,

【 7 社】

• Let me see (...)

【 5 社】

• Let's see.

• 相手の発言を繰り返すことによって考える時間を確保する

(例)

Emi: Are you free this Saturday?

Miss Jones: This Saturday? Sorry, I'm busy on that day.

Emi: How about next Saturday?

Miss Jones: OK, that's great.

(SELECT, p.102)

その他 (Hmm ... , Err ... , Umm ... , and ... , えっと、など) 多数

おもしろい表現としては、相手の問いかけに対して *That's a good question.* 「それは良い質問だね」や *That's a tough theme.* 「それは難しい問題だね」などと言及しながら、すぐに応答せずに時間を稼いでいると思われる会話例もあった。(Interact, p.62 など)

#### ②Hesitating のための表現

• Well, actually, I'm leaving in a few minutes.

(English Street, p.36)

• I hate to say this, but ...

• The truth is ...

• I'm sorry, but ... など

## 6.5. 分析全般を通して、及び教室への示唆

言語の使用場面や機能については、各社とも既によく意識してその開発がなされているが、「コミュニケーション方略」の指導という視点では物足りなさを感じる。例えば、今回分析を試みた4つのコミュニケーション方略のための表現が、レッスン本文中ではあまり登場せず、裏表紙や付録的なスペースでの扱いが多い。具体的には次のようなタイトルを付け提示してある。

- A社 コミュニケーションのエチケット (黙っていないで反応しよう)  
Let's Speak English in the Classroom
- B社 会話のきまり文句  
COMMON EXPRESSIONS
- C社 Bits & Pieces  
Classroom English
- D社 Warm-up lessons(2) Classroom Talk (教室で使う表現)  
(3) Conversation Help (話をつづけるための表現)
- E社 WHAT DO YOU SAY IN SUCH CASES?  
Warming up (2) CLASSROOM ENGLISH
- F社 Let's Use English in the Classroom  
(When and How to Say It)
- G社 CONVERSATION TIPS
  
- H社 本文中での扱いのみ

教科書教材が色々な制限の中で開発されているのも事実であり、その中に同じ表現を頻繁に盛り込むことは不可能である。しかし、それらの表現がコミュニケーションを成立させ、自立した談話の参加者を育成するために必須であれば、教師自身が使用している教材の特徴や限界を理解しつつ、日常の指導(例えば教室でのALTとのやりとりなど)の中で補おうとする姿勢が大切である。裏表紙などでの一時的な指導だけでは学習者の「実践的コミュニケーション能力」の育成は期待できない。

また、発話の「機能」の判別は多くの要因に左右され、困難さを伴う。例えばPardon?という発話はふつう「反復を求める」ための表現であるが、次のように聞き手の判断により「明確化(言い換え)を求める」表現と受け取られることもある。

A: What's the purpose of your visit?

B: Pardon?

A: What are you going to do?

B: I'm going to go to high school.

(*Speak to the World*, p.6)

このようにひとつの発話が2つの機能(double functions)を有することはよくあり、我々外国語教師は談話分析のダイナミックさを感じるとともに、この分野に関する幅広いそして深い知見を備えるべきである。

## 7. おわりに

外国語学習者にとって、「語彙力」を高め確かな「文法知識」を身に付けることは重要である。しかし、「実践的コミュニケーション能力」を育成するには、「言語の働き（機能）」や「談話の組み立て」を意識し、コミュニケーションを維持・修復するための方略を身に付けることも不可欠である。それ故、それぞれの「コミュニケーション方略」を用いるための明示的表現を効率よく指導することは、外国語教師の重要課題の1つである。本稿が「コミュニケーション方略」のより効果的な指導の可能性を探る一助となれば幸せである。

### 【参考文献】

- Amy B.M. Tsui. 1994. *English Conversation* : Oxford University Press.  
Canale, M. 1983. "From communicative competence to communicative language pedagogy." In Richards, J.C. and R.W. Schmidt (eds.) *Language and Communication* : Longman.  
Chaudron, C. and J.C. Richards. 1986. "The Effect of Discourse Markers on the Comprehension of Lectures." *Applied Linguistics* 7, 113-27.  
Coulthard, Malcolm. 1985. *An Introduction to Discourse Analysis* (Second Edition) : Longman.  
McCarthy, Michael. 1991. *Discourse Analysis for Language Teachers* : Cambridge University Press.  
Nunan, D. 1993. *Introducing Discourse Analysis* : Penguin.  
Oxford, R.L. 1990. *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know* : Newbury House.  
Van Ek, J.A. and L.G. Alexander. 1975. *Threshold Level English* : Pergamon.  
Van Ek, J.A. and J.L.M. Trim. 1991. *Threshold Level 1990* : Council of Europe Publishing.  
Widdowson, H.G. 1978. *Teaching Language as Communication* : Oxford University Press.

真田謙一郎、達川奎三 1998 『オーラル・コミュニケーションのテスト実例集』東京書籍中国支社

新里真男 1999 「新学習指導要領のねらい」『英語教育』6月号 8-10.

田中正道、J. ラウアー、達川奎三 1999 『英語のコミュニケーション方略 -Strategies for Communication in English-』英宝社

深沢清治 1997 「日本人英語学習者の Pragmatic Competence 研究の応用 -英語教科書に見られる refusal の分析を中心に-」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 27. 287-292.

米山朝二、松沢伸二訳 1998 『新しい英語教育への指針 中級学習者レベル<指導要領>』J.

A. van Ek and J.L.M. Trim 著 *Threshold Level 1990* 大修館書店

(分析に用いた高等学校用「オーラル・コミュニケーションA」検定済教科書)

<i>Hello there!</i>	東京書籍	24.5%
<i>SELECT</i>	三省堂	12.7%
<i>EXPRESSWAYS</i>	開隆堂	8.3%
<i>Interact</i>	桐原書店	6.5%
<i>Birdland</i>	文英堂	6.5%
<i>ECHO</i>	三友社	6.2%
<i>Speak to the World</i>	教育出版	5.8%
<i>English Street</i>	第一学習社	5.7%

数字は1998年度採択率を示す。

(『内外教育』1998年1月16日号 p.12)